

# スペイン語の前置詞 EN の機能に関する考察

田 林 洋 一

## 1. 序

本稿ではスペイン語の前置詞 EN を他の前置詞, 特に前置詞 A との比較を通して, 主に空間的機能をプロトタイプ理論とスキーマ理論から規定することを目的とする。

### 1.1 前置詞 EN の機能の概略

前置詞 EN の機能については様々な学者が様々な角度から論じている<sup>1</sup>。以下, EN の一般的機能を山田 (1995) に沿って列挙する。

- (1) a. Pedro vive en Madrid.
- b. La olimpiada de Barcelona se celebró en 1992.
- c. Buscamos un especialista en periodismo.

<sup>1</sup> 先行研究のほとんどは EN の機能を空間 (espacio), 時間 (tiempo), 概念 (noción) の 3 つに分けて説明している (Gili Gaya (1964), Hernández Alonso (1970), Hernández Alonso (1984), Alarcos Llorach (1984), Marcos Marín (1980), RAE (1973) 等。なお, RAE は概念の代わりに様態ないしは道具 (modo o instrumento) という用語を使用しているが, 説明は同様)。これは前置詞の先駆的研究である Brøndal (1950) 及び Jespersen (1924) の影響によると思われる。Durán (1973) は EN を 22 種類に分類しているが, それぞれの分類が重複も多く独立していない。Bruyne (1999) は先の 3 分類に <confiar, creer, esperar... + en> 及び <en + gerundio / infinitivo> という分類を付け足しているが, EN 単独の機能については先の 3 分類に準拠している。以上の理由から, 本稿では山田 (1995) の分類を基盤とするが, 先の 3 分類を否定するものではない。

- d. Quiero cambiar estos cheques en pesetas.
- e. Mi mujer pintó el dormitorio en color rosa.
- f. En absoluto.
- g. En acabando esta faena, voy contigo.

山田 (1995 : 156-159)

それぞれ、(1a) は空間、(1b) は時間、(1c) は、分野・領域、(1d) は変化の結果、(1e) は様態・手段・方法、(1f) は en+名詞・形容詞、(1g) は en+現在分詞・不定詞の機能における例である<sup>2</sup>。本稿では EN 単独の機能分析を目的とするため、(1f) 及び (1g) は基本的に扱わない。また、(1b) と (1c) は両者とも (1a) を基盤とし、前者は物理的空間表現を抽象的時間表現にメタファーとして拡張したもの、後者は物理的空間表現を抽象的空間表現に拡張したもの (Lakoff & Johnson (1980) 他を参照) と言えるので、実質的に (1b) 及び (1c) は (1a) に還元しうる。基本的に言語解釈は、物理的空間<時間的空間<心理的空間という階層を基に行われる (中右・西村 (1998) はしがき他を参照)<sup>3</sup>。つまり、抽象領域は具体領域を基に理解され、そこには比喩的拡張があると仮定される。本稿では以上の点を踏まえ、主に物理的空間認識に根ざした EN の意味的機能を考察する。

## 1.2 EN の空間的プロトタイプ

まずは辞書レベルでの定義を見てみよう。EN を辞書で引くと、『西和中辞

<sup>2</sup> 山田 (1995) はこれらの機能を更に下位分類して説明しているが、下位分類間に本質的な機能の相違はない。

<sup>3</sup> Whorf (1956) の報告によると、アメリカ・インディアン語の一種であるホーピ語は、空間認識ができない場合は非空間的事象に写像して表現することはできない。従って、空間が問題になっていない場合では、空間的意味から拡張された抽象的意味は理解されない。即ち、空間的な表現を用いることができないホーピ語では「裏口入学」という慣用句は許されない (田中他 (1978 : 201))。従って、メタファー的写像は必ずしも言語に普遍的でない可能性もある。

典第2版(小学館)』では、①空間、1.「(場所)…に、…で、…のところに」が第1義として掲載されており、以下、2.「(さまざまな広さ・形状の場所)…で」3.「(平面)…の上に」、4.「…の中に [で]」、5.「…の中へ」と続き、2番目の意味として、②時間、が記載されている。『西和辞典第1版(小学館)』でも同様に、1.《場所》「…で」「…に」「…において」「…の中に」「…へ」「…の中へ」「…の上に」となっており、第2義に《時間》が登場する。また、『クラウン西和辞典(三省堂)』でも、第1義としてI《場所》、「…で、…に、…の中に(へ)」と記載されており、II《時間》と続く。「場所」の項目を詳しく見ると、①《位置》「…で、…に、…の中に(で)」、②「…(の上)に」、③「…(の中)へ [に]」となっている(因みに、2番目の意味として、やはり《時間》「…に」が記載されている)。『現代スペイン語辞典(白水社)』では、【英 in】[内部・範囲]とした上で、①[場所]、i) [内部]「…の中に」「…で」、ii) [地点]、iii) [体の部位]「…を」「…に」、iv) [表面]「…の上に」、v)「…の中を」と説明している。そしてやはり2番目の意味として[時間]が現れる。その他、『プエルタ新スペイン語辞典(研究社)』や『ポケット・プログレッシブ西和・和西辞典(小学館)』、『デイリーコンサイス西和・和西辞典(三省堂)』などにも同様の記載が見られる。「～に」は位置を表すと同時に着点も表すが、上記の辞書に列挙されているENの訳語としての「～に」は位置が中心義で、着点は二次的であろう。

西和辞典を見ると、María Moliner の *Diccionario de uso del español* では、ENの第1義として、(del lat. *in*) 1 prep. Expresa el lugar dentro del cual está u ocurre la cosa de que se trata: としており、続けて、También, el lugar sobre el cual, とし、更に Se emplea también, con sentido correspondiente, cuando en vez de tratarse de un lugar material, se trata de un medio o ambiente: と記載されている。そして、2番目の意味として、2. Se une a los nombres de estaciones, a los nombres *año, siglo, época* y equivalentes, o a los números con que se designan, para expresar el tiempo *en que*: と記しており、やはり2番目の意味として「時間」が載って

いる。SGELの*Gran diccionario de la lengua española*は[en]prep. 1. Se usa para expresar el lugar donde sucede algoとし、続けて、2. Para expresar el lugar donde algo está guardado, contenido, puesto, etc.とし、3. Para expresar una relación de tiempoとしている。Real Academia Españolaの第23版*Diccionario de la lengua española*にも、第1義としてDenota en que lugar, tiempo o modo se realiza lo expresado por el verbo a que se refiere. とある。

西英辞典も参考にすると、*Oxford Spanish Dictionary*ではENをA(en expresiones de lugar)とし、1.(refiriéndose a una ciudad, un edificio)と記載し、以下、2.(dentro de) in, 3.(sobre) onと続く。ついで、B. 1.(expresando circunstancias, ambiente, medio) in…となっている。なお、時間についてはF(en expresiones de tiempo)の記載まで待たねばならない。*The Penguin Spanish Dictionary*では、ENをin(to); up(on); at; for…と説明している。

次に、文法書のレベルで考察してみよう。瓜谷(2002:252)では個々の前置詞の説明がなく、巻末に記載されている単語集の中でENが取り上げられ、prep.「…に、…の中に、…で」とある(この意味で、瓜谷の定義は辞書的である)。西川(2010:263-264)には、ENの意味として、1. 場所[…で、…に]と記載され、以下、2. 位置[…の上に、…の中に]、3. 時点[…で、…に]…と記載されている<sup>4</sup>。小林他(2003:380-386)では、a. 空間的存在、

<sup>4</sup> 「～に」が〈個体の位置〉を合図するのに対して、「～で」は〈状況の位置〉を合図する。

(i) a. 法隆寺に、金堂が2つある。

b. \*法隆寺で、金堂が2つある。

(ii) a. フィンランド沖で、大型フェリーが沈没した。

b. \*フィンランド沖に、大型フェリーが沈没した。

(i)では金堂が個体なので、「～で」を容認せず、(ii)では沈没したという状況ないしはイベントを指し示しているの、「～に」を容認しない。その他、「～に」は基本述語動詞に内在的な項(argument)を表示するが、「～で」は随意的な付加語(adjunct)を表示する。但し、統語的に峻別可能な項と付加詞は、認知的に

b. 時間的内在…となっている。また、江藤 (2003: 128-129) では、EN を en (in, on)…とし、注として「英語の in は普通スペイン語の en に当たるが、このように「～の表面の上に」では英語の on に当たる。sobre, encima de を使ってもよいが、en が多く使われる」と述べている。

スペイン語で書かれた文法書に目を転じてみると、Alarcos Llorach (1994: 281) に EN の具体的な使用法が載っており、例文として en otra mesa rodeaba el cadáver [...] un grupo de personas... とあるが、明確な定義付けはされていない。Bruyne (1999: 669-674) には、まず Lugar と明記され、*En es una preposición de coincidencia espacial en sentido amplio.* とあり、続けて 2 番目の意味として Tiempo が現れ、*En indica el tiempo durante el cual ocurre una ocación.* と記載されている。Hernández Alonso (1970: 328) には、*La preposición en hereda de los valores de la latina in, tiene un matiz principal de reposo o situación en tiempo y espacio.* と記載されていて、時間 (tiempo) を空間 (espacio) の直前に持ってきて説明しているが、これは例外というべきであろう。更に、時間を空間の前に説明した文献に RAE (1973: 441) がある。RAE (1973: 441) は、EN を Tiempo: *Estamos en la canícula; ... Lugar: Está en casa; Entró en la iglesia.* Modo o manera: *Lo dijo en broma;...* と記載している。Gili Gaya (1964: 253-254) では、EN を Predomina la idea general de reposo, tanto si se refiere al espacio como al tiempo. と説明している。最後に、RAE (2009: 2266) では、EN の説明を、*Con la preposición en se ubican personas o cosas espacial o temporalmente:* と記載し、更に、*Esta es, de hecho, la preposición que expresa de forma más característica el concepto de 'ubicación'.* と説明している。

辞書レベル、文法書レベルのいずれを検証しても、EN は「～の中に」「～に」という、閉じられた空間、即ち「空間的内包関係」という意味を持っている

---

は連続体を成している。「～に」と「～で」の興味ある比較については中右・西村 (1998) 他を参照。

ことが分かる。次節では、EN が持つ「空間的内包関係」の意味から、更に他にどのような意味や用法が現れるのか、主に前置詞Aとの比較から論じてみたい。

## 2. EN と A の比較

本節では López (1972), Durán (1973), 山田 (1995), Bruyne (1999) らの主張に照らして、EN と A の機能的相違を概観する。

### 2.1 EN と A の機能的相違

EN と A の機能的相違は、①前置詞句が指し示す空間の境界が閉じているか開いているか、②空間での振る舞いが動的か静的か、に依存する。Gili Gaya (1964: 253) では、EN と A の相違を取り上げて、Podríamos decir que mientras *a* establece una relación dinámica *en* es la preposición de las relaciones estáticas: と説明し、続けて vivo en Madrid; estamos en verano; en la calle; en la mesa; en la juventud; en el año 1961. という例を挙げている。以下、検討してみよう。

#### 2.1.1 物理的变化の EN と状況変化の A

まず、仮定として EN は物理的变化を表し、A は状況変化を表すと提唱したい。ここで用語の確認をしておこう。変化 (change) と状態 (state) に関する定義については、池上 (1975: 329) が詳しく説明している。変化と状態はそれぞれ対立する概念であり、変化は常にその前後の状態を予測する。つまり、変化と状態は言語的な表現の対象になりうる、あらゆる出来事を大きく2つに分類する範疇だと言える。池上は以下のような連鎖を挙げて、言語表現における事象のあり方を説明している。

(2) …状態<sup>1</sup>→変化<sup>1</sup>→状態<sup>2</sup>→変化<sup>2</sup>→状態<sup>3</sup>…

池上 (1975 : 329)

従って、池上の定義に従えば、「状態変化」という語はそれ自体が内的矛盾をはらんでいることになる。本稿では池上の用語を採用し、かつ抽象的な事象を「状況」という用語で表すことにする。「状況」とは、物理的空間関係のみならず、抽象的に認識される〈状況〉の意味でも使用される。また、「状態」という用語は、本稿では静的なものとして取り扱っており、動的な移動（変化）と対立する。従って、動的→変化を含意、静的→状態を含意、という一般化ができよう。

まず、以下の文を検討する<sup>5</sup>。

- (3) a. Pedro se sienta en la mesa.
- b. Pedro se sienta a la mesa.

(3a) は「机の上に座る」という場所的な意味を持つが、(3b) は「席につく」という状況の意味を持つ。つまり、(3a) で Pedro が机という物体が指し示す占有空間に内包されているのに対し、(3b) では状況の変化、即ち Pedro が席についていない状況から席についたという状況の抽象的な移動を表している。(3a) は Pedro が机の上に座っていないならば成立しない文であるが、(3b) では、例えば机の丈が非常に低く、椅子がないような座敷のテーブルに腰掛けたとしても成立しうる。また逆に、机の丈が非常に高く、椅子がなくて Pedro が立っている状態であったとしても、机に接していれば成立する。従って、(3b) は、①席についていない状態→②席に着くという変化→③席についた状態、という3つの過程を表しているということが出来る。その意味で (3b) は抽象的な変化から状態への移動、即ちメタファー的な移動を表し

<sup>5</sup> 以下、出典のない例文は全て筆者の作成であり、4名のインフォーマント(出身メキシコ、チリ、スペイン、ペルー)に容認されたものである。

ている。

一方、(3a)は机の上に Pedro が乗っていれば成立するが、動詞 *sentarse* の語彙内在的な意味により、Pedro が机の上に立っている事象を表すことはできない。また、Pedro が非常に大きな机の上に座っていて、他の座席についている人たちとコミュニケーションが取れないような状況であったり、食事が取れないような状況であっても、Pedro が机の上に座ってさえいれば(3a)は成立するので、具体的かつ物理的である。従って、(3a)の *en* は *encima de* や *sobre* と置換可能である。

- (4) a. Pedro se sienta encima de la mesa.  
b. Pedro se sienta sobre la mesa.

先の辞書的定義で「～の上に」という意味が必ず取り上げられているのは、こうした例があるからである。

EN が空間的内包関係、即ち物理的位置関係を重視し、Aが状況を重視している更なる例として、(5)が挙げられる。

- (5) a. La rana se convierte en el príncipe.  
b. \*La rana se convierte al príncipe.  
c. ?Los yenes se convierten en dólares.  
d. Los yenes se convierten a dólares.  
e. \*Juan se convierte en el catolicismo.  
f. Juan se convierte al catolicismo.

(5a)は魔法か何かによって、物理的に *rana* が *príncipe* に変化したことを表している。従って、状況を含意する A を用いた (5b) は非文となる。一方、(5c) はマジシャンが手品で「物理的に」*yenes* を *dólares* に変えた場合は容認されるが、それ以外の文脈では容認されない。(5d) は *yenes* を *dólares* に



換金した場合であり, yenes と dólares の等価価値は変わらず, 状況の変化が含意されているために容認される。(5e) は Juan 自体に何か物理的な変化が起こったわけではなく, 信仰の対象という抽象物に変化したために容認されず, A を用いた (5f) では適格となる。更に用例を見よう。

- (6) a. Juan montó a caballo.  
 b. Juan montó en el caballo de su padre.
- (7) a. \*Juan montó a taxi.  
 b. Juan montó en taxi.

(6a) は馬に乗っているという状況を表しているのに対し, (6b) はある特定の馬と Juan との物理的かつ空間的關係を表している。つまり, (6a) は Juan が横乗りをしていたり, 極端な話, 馬の脇にしがみついているといったような状態で乗馬しようとして成り立つ命題である。要は, 馬をある程度制御可能な状況に置く「乗馬」という行為が描写されている。それに対して (6b) は特定の馬に関する記述からも明らかなように, (6a) と異なり馬を物理的な物体とみなしている。従って, 馬の脇にしがみつくような様態の場合には, (6b) の表現は容認されず, 必ず Juan は「馬の上」にいないといけない。逆説的に言うと, 馬を制御可能ではない状態, 例えば馬の背中に立っていて, 手綱を握っていないという状況でも (6b) は成り立つ。

(7a) は taxi に「乗馬する」わけにはいかないので非文となるが, (7b) では特定の乗り物として taxi を扱っているため, とにかく taxi に物理的に乗り込んでしまえば命題が成立する。また, タクシーだけではなく, 他の乗り物に関しても, 動詞 montar に対して A は使えないが EN は使用可能である。よって, EN は物理的空間関係を重視し, A は動詞 montar の語彙の意味に影響を受け, 「乗馬する」という状況でしか使用され得ない。

- (8) a. Montó en la bicicleta y salió.

- b. Montó en un tren (un avión).
- c. Me gusta montar en coche.

(8)では、それぞれ *bicicleta* (8a), *tren / avión* (8b), *coche* (8c) という乗り物に物理的に乗っていれば成立する。一方、(8)に出現する EN を A に変えると全て非文となるのは、やはり A が動詞 *montar* の影響を強く受け、「乗馬する」という状況を重視するからである。

- (9) a. Montó a la inglesa.
- b. Montó a pelo.
- (10) Montó sobre un caballo.

(9)はそれぞれ「片鞍乗りをした」(9a), 「裸馬に乗った」(9b) という意味だが、馬が動作主の制御が可能な状況でないと容認されない。一方、(10)のように *sobre* を用いると、「馬にまたがる」という意味だけが残り、またがった結果、馬が制御可能かどうかという情報までは与えられない。従って、A は先に検討した動詞 *sentarse* とも考え合わせると、動詞が提示する意味に敏感に反応する一方、EN は動詞が提供する情報にあまり影響されず、むしろ EN 単独が持つ空間的意味、即ち空間的内包関係の意味が前面に押し出されると言うことができよう。

ある特定の事物に対する空間的内包関係 EN と状況 A の差異は、前置詞に伴って現れる名詞句の性質によっても左右される。(6b)で出現した *el caballo de su padre* は、名詞句が特定されているため、より物理的な意味を持つ EN の随伴を容認し、抽象的な状況を示す A では容認されない。以下の文を参照。

- (11) a. Juan guarda los papeles en una caja fuerte.
- b. \*Juan guarda los papeles a una caja fuerte.

(11a) では、①「ある丈夫な箱」という物理的な描写が強いため、② EN 単独が持つ空間的内包関係の意味、の2点から容認される。一方、①と②の条件はいずれも A では許されないため非文となる。更なる例として、(12)を参照。

- (12) a. Tito y Lucita se quedaron al sol. [*El Jarama*: 63]  
 b. Más abajo vio a Mely, en el sol. [*El Jarama*: 64]

(12a) は太陽の下で陽を浴びる、日焼けというイベント的な状況を表すために A が用いられている。一方、(12b) は日向にいるか日陰にいるか迷った挙句に日向にいることを選択したという表現であるため、物理的な日向として sol がクローズアップされ、EN が選択されている。このことから、EN は物理的位置関係、A は状況を表すということが出来る。そして、EN は固有の意味である空間的内包関係が前面に押し出されるのに対し、A は動詞に依存する割合が高いため、それ単独の意味がクローズアップされることは EN よりも少ない。

### 2.1.2 空間的内包関係の EN と厳密指示性の A

2 番目の仮説として、EN は空間的内包関係を表し、A は厳密指示性を表すと提唱しよう。EN の代表的意味である「空間的内包関係」は、いわゆる「～の中に」「～に」などの場所を表すことは既に見た。即ち、示された境界が閉じているという意味を同時に持つ。A が持つ「厳密指示性」とは、ある要素に対してまっすぐに進んでいく、終着点や方向といった意味を持つ。従って、示された境界は閉じてはいない。辞書的な定義としては「～へ」や「～に」といった意味が挙げられるであろう。同じ「～へ」(または「～まで」と訳されるが、前置詞 HACIA は A よりも漠然とした方向を表し、また、前置詞 PARA は「終着点」という意味がほとんどないか、あるいはあまり意識されず、単なる方向の指示である。また、前置詞 POR には「～を巡って」「～を回って」という意味がある。

- (13) a. Voy a Madrid.  
 b. Voy hacia Madrid.  
 c. Voy para Madrid.
- (14) a. Viajé a Madrid.  
 b. Viajé por Madrid.

(13a) は「マドリードへ行く」、(13b) は「マドリードの方へ行く」、(13c) は「マドリードの方に向かう」(終着点はマドリードとは限らない) という意味の相違が見られる。また、(14a) は「マドリードへ旅をした」という直線的な意味を持つが、(14b) は「マドリードを(ぐるぐる回って)旅をした」という意味がある。

以上のように、前置詞Aは HACIA, PARA, POR などと比較して、終着点や地点、時点などの意味が指示的であり、かつそれらは厳密に規定される。そこで、本稿ではAが持つ意味を「厳密指示性」という用語でくくることにしたい。

さて、EN とAを比較する場合、空間的・物理的な位置関係からその相違を導き出すのは容易ではない。基本的に、EN は静的、A は動的という異なる意味カテゴリーに所属するからである。よって、空間的・物理的關係からメタファー的に拡張された時間表現について比較検討してみたい。

- (15) a. Vine en esta hora.  
 b. Vine a esta hora.

(15a) は「この時間内に」という空間的内包関係から抽象的内包関係(この場合は時間)へのメタファー的拡張が見られる。つまり、(15a) で示されているのは、ある時間内における空間的内包関係の規定である。(15b) は「今」という厳密な時間指定が行われており、ahora との置換が可能である。この空間的内包関係と厳密な時間指定の差異は、EN が基本的に年月といった持続

的な時間を表すのに対し、Aは日時という厳密な時間を指定することからも明らかである。この時間に対する内包関係と厳密な時間の指定は、基本的に話者の心理に依存するため、しばしば選択的である。

- (16) a. Se hizo en ocho horas.  
 b. Se hizo a las ocho.

(16a)は「8時間以内で/に」という持続的内包関係を表すのに対し、(16b)は「8時に」という厳密な時間を指定している。なお、「～で」は出来事の時間的局面(段階/過程)において捉えられているのに対し、「～に」は出来事の起こった時点を指し示すように思われる。その証拠に、ENを用いた(16a)では、「8時間以内で」とは言えるが、Aを用いた(16b)では「\*8時で」とは言えない。それはともかく、(16b)はある特定の時間を指し示しているため、定冠詞を伴う必要がある。逆に、(16a)では時間に厳密さを求めているため、定冠詞を伴うと非文となりうる<sup>6</sup>。

更に空間的内包関係(EN)と厳密指示性の(A)の違いが見られるのは、ENは月や年などの比較的広範な継続的時間を表す際に用いられるのに対して、Aは時間というある点的な、いわば同時発生的な厳密指示性を表す場合である。例えば、en enero, en 2013, en primavera という表現と、a las ocho, a las cinco などのような棲み分けが見られる。後者は、時間を厳密に指定するという点で、前者のENよりも指示性が高い。

<sup>6</sup> Se hizo en las ocho horas. が非文にならない状況は、「ある特定の8時間以内」、例えば「2013年2月22日の午後2時から10時までの8時間以内に」行動が起きなければならない、という文脈が含意されている場合である。つまり、ここでの定冠詞 las は特定の期間を指定し、ENは特定の期間における持続時間を意味すると考えられる。

## 2.1.3 静的なENと動的なA

更なる仮定として「ENは静的な空間関係を表し、Aは動的な空間移動を表す」というテーゼを提唱してみよう（ENは静的であり、Aが動的であるという主張が Gili Gaya (1964: 253) にもあることは既に見た）。

(17) a. Hay vendedores a ambos lados. [*A tientas y a ciegas*, 237]

b. Hay vendedores en ambos lados.

López (1972: 164-165)

(18) a. Entró en la iglesia. [RAE 1973: 3.11.5i]

b. Cuando los Nazis entraron a París. [P. Neruda, *confieso que he vivido*, 66]

Bruyne (1999: 669)

(19) a. María confió a Pedro.

b. María confió en Pedro.

(17a) と (17b) の命題真値は同一であるが、話者の *vendedores* に対する視点が異なる。(17a) は話者が *vendedores* を「両側」の外側から動的に知覚しているのに対し、(17b) は *vendedores* を「両側」の中に取り込んでいる<sup>7</sup>。その結果、(17a) では話し手はその場面の中にいないので「両側のどこに売り子がいるか」は分からない。一方、(17b) では話し手は命題の場面の中にいるので、「両側のどこに売り子がいるのか」は視覚的に把握することができるということになる (*Hay vendedores ?en/ a ambos lados, pero no sé exactamente dónde están ellos.*)。つまり、(17a) は外側から見た客観的、(17b) は内側から見た主観的な視点を持っているということになる。「主観的な視点」とは、Langacker らが提唱する「主体化 (subjectification)」とはほぼ同義である (Langacker (1990), 河上 (1996: 195) 他を参照)。この含意的

<sup>7</sup> Langacker (1987) の on-stage と off-stage の議論も参照のこと。

な意味解釈は、2名のインフォーマントからも同じ指摘を得た。同様の議論として、(18)の対立を参照<sup>8</sup>。

動的なAに対して静的なENの対立は(19)にも見られる。(19a)は「MaríaがPedroの手に委ねる」という、MaríaからPedroへの動的な関係を意味するが、(19b)は「MaríaがPedroを信頼する」という、Maríaの心という空間の中に、Pedroが内包されているという解釈が「信頼」にはあると思われる<sup>9</sup>。つまり、Maríaの「信頼」という行為が、Pedroという「場」において成されている、という場所の解釈が可能である。「信頼」において、Maríaというある人間の個を空間に見立てる考え方は、動詞 *recibir* にも現れている。

- (20) a. María le recibió con confianza.  
b. Pedro recibió su confianza.

(20a)はle(彼、この場合はPedroとする)を「受け入れる」という空間認識的な視点から概念的な視点へとメタファー的に拡張されている。また、(20b)も同様に、動詞 *recibir* が「彼女の信頼を受け取る」という、物理的な視点(「受け取る」という行為は基本的に物品をやり取りする物理的なものである)から、概念的、抽象的な視点へとメタファー的に拡張されている。つまり、「信頼する」という行為は、少なくともスペイン語の動詞 *confiar* に関する限り、物理的な位置関係から抽象的な概念へとメタファー的に写像された表現であるということが出来る<sup>10</sup>。日本語でも、「信頼を勝ち取る」「信頼を

<sup>8</sup> Bruyne(1999: 669)は、動詞 *entrar* に後続する前置詞が、ENの場合はヨーロッパのスペイン語、Aの場合はラテンアメリカのスペイン語に顕著に現れると主張する。地域差による説明も無視できないが、(18a)と(18b)を意味的に異なると感じるインフォーマントもいたため、端的に地域差だけによる相補分布と断言はできないと思われる。

<sup>9</sup> (19)は、註1で示したENの3分類のうち、概念(*noción*)に相当すると思われる。しかし概念を表す場合でも、空間的認知と同様、ENの内包関係を表すプロトタイプは崩れていない。

<sup>10</sup> こうしてみると、人間が空間を知覚し概念化する領域には、①物理的領域、②時

得る」などの表現に、メタファー的な拡張が見られる<sup>11</sup>。Gili Gaya (1964: 253-254) には、*creer a mi hermano* significa otorgarle crédito en lo que dice, mientras que *creer en mi hermano* expresa una creencia mucho más extensa, que abarca no sólo lo que dice, sino también su talento, su rectitud, todo el complejo de sus cualidades. という記述が見られる。Gili Gaya のこの言は、A を伴うと限定的な意味（厳密指示性）を表すのに対し、EN を伴うと広範な範囲を表し、空間的意味が押し出されるという本稿の主張を裏付けるものであると思われる。

更に(2)を検討しよう。

- (2) a. Y el dinero que recibiste en cambio fue de verdad, ¿sí o no?  
[*La barca sin pescador*: 89]
- b. Sus regalos, sus visitas inesperadas, sus planes para el futuro, sus extensos telegramas, sus escasas cartas; pero, a cambio, sus conferencias a Madrid casi diarias y, según amigos míos que las cronometraban, de más de media hora. [*A tientas y ciegas*: 108]

(21a) の en cambio は「代わりに」を意味し、受け取った dinero の前の状態は一切含意せず、最終的に落ち着いた状態を含意する。一方、(21b) は「交換で」を意味し、conferencia が（前の状態から）今の状態（casi diarias）

---

間的領域、③心理的領域、の3つが存在することになる。このうち、「信頼する」という動詞における意味解釈は、③の心理的領域によって行われている。また、「～で」の使用に目を転じてみると、「ライブニッツの考えでは、言語は精神の鏡である」や「私見では、日本経済は夏に回復に向かう」の「～で」は認識主体の心理的空間である。「信頼する」という行為にも心理的空間の知覚認識が働いていると言えるだろう。

<sup>11</sup> 格の項が具象名詞だからと言って、必ずしも具体的位置を合図しているわけではないことがここで確認される。



へと移行する状況の変化を含意する。この含意は (21b) が pero を伴って現れていることで、より顕著である。

#### 2.1.4 空間的意味の EN と A

その他、同じ事象を表していながら、空間的意味を表す場合に EN と A が共起できる例が数多く López(1972: 165)に挙げられている。例えば、“Siempre que volvíamos por la calle de San José estaba el niño tonto a la puerta de su casa” [*Platero y yo*: 54] / ...estaba el niño tonto en la puerta de su casa や “me desvelaba el rumor sollozante del agua redonda que caía, de la azotea, en el aljibe [*ibid.*,: 78] / ...que caía de la azotea, al aljibe; などの例である。これらは全て、EN と A の両者を用いても、基本的な意味は変化しない。López はスペインの黄金時代には EN と A の使用がかなりの程度相互に干渉されていたと指摘する。更に、セルバンテスの著作に “Aquel amigo que vivía a San Juan” という表現が出現するが、これは話し言葉であるか、ないしは「個人的な規範 (norma individual)」つまり、個人言語 (idiolect) の一種であると主張している。

#### 2.2 EN と A の空間的プロトタイプ

A は状況の変化を表すという点で動的であるのに対し、EN は物理的空間関係を表すという点で静的である。そして、到達点や厳密指示性を重視する A は、それが指し示す領域 (空間的な領域と抽象的な領域) の境界が開いているのに対し、内包関係や持続性を重視する EN は、領域の境界が閉じている。(22a) は EN、(22b) は A の空間的図式であり、x は変項を表す。

- (22) a. [← x →]  
 b. ……→ x ]

(22a)では、EN が空間に対して閉じた境界を強調した観点を表しているの

で静的、(22b)では、Aは空間に対して開かれた空間から言及された対象が向かってくる観点を強調しているので動的であることを示している。次節では、ENとAの比較からENの空間的プロトタイプが(22a)のように導き出されたことを受けて、他の空間的機能を持つ前置詞との比較を試みる。

### 3. ENと他の前置詞との比較

本節では、ENを幾つかの前置詞句<sup>12</sup>と比較することにより、ENの空間的プロトタイプの更なる一般化の下地とする。

#### 3.1 ENとENCIMA DE / SOBRE

まずはENとENCIMA DE及びSOBREの差異を検討しよう。既に辞書の定義でも触れたように、ENは時に「～の上に」という意味を持つため、ENCIMA DE及びSOBREと等価になることがある。本節では、相互間の機能的差異に注目したい。

<sup>12</sup> 本節では紙幅の都合上、ANTE, BAJO, CON, DESDE, HASTA, PARA, SIN, SO, TRAS等は対象外とした。しかし、これらの前置詞(句)とENとの比較は無意味ではない。特にCONとの比較に関しては、López (1972: 188-189)に興味深い考察が見られる。また、CONTRAとENとの比較には、空間的な認識に関すると思われる指摘がLópez (1972: 194)にある。

- (i) a. Se dio un golpe en la pared.  
b. Se dio un golpe contra la pared.

López (1972: 194)

Lópezによると、(ia)は叩いたのが壁であればどの表面であっても良いという含意を持つが、(ib)は、壁のある一点に「向かって」叩いたという動的な含意を持つという。この説に従うなら、空間表現においてCONTRAはAと同様の含意を持つと考えられるが、当然のことながらCONTRAとAが等価という訳ではない。(i)は両者とも動的な意味を持ち、叩かれた空間的对象の変化という点ではENもCONTRAも変わらない可能性がある。

なお、前置詞に挙げられる語彙は各研究によって違いがあるが、本稿ではBruyne (1999)を基準とした。

- (23) a. Pedro saltó en el suelo.  
 b. Pedro saltó encima del suelo.  
 c. Pedro saltó sobre el suelo.

(23)の命題真理値は全て同一で「Pedro が床の上で飛び跳ねた」と解釈される。しかし、(24)は意味が異なる。

- (24) a. El pez de colores está en la pecera.  
 b. El pez de colores está encima de la pecera.  
 c. El pez de colores está sobre la pecera.

(24a)は「金魚が水槽の中にいる」と解釈されるのに対し、(24b)及び(24c)は「金魚が水槽の上に放り出されている」と解釈される。更に以下の文を参照。

- (25) a. Una rata saltó en la mesa.  
 b. Una rata saltó encima de la mesa.  
 c. Una rata saltó sobre la mesa.  
 (26) a. Mi carta está en la mesa.  
 b. Mi carta está encima de la mesa.  
 c. Mi carta está sobre la mesa.

(25a)は、「ねずみは机の中で飛び跳ねた」とする解釈と、「ねずみは机の上で飛び跳ねた」とする2つの解釈が可能だが、山田(1995:157)は、「sobre や encima de も平面の上を指すが、さらに表面から離れている場合にも用いられる。en は用いられない」と指摘する。即ち、「飛び跳ねた」という行為は表面から対象のねずみが離れてしまうため、後者の解釈を積極的に認めていないと思われる。だが、全てのインフォーマントが「…机の中で…」と「…

机の上で…」の両者の解釈を容認した。また、山田は続けて「「上の平面」の意味を強調するときは *sobre* を用いる (*ibid*)」と指摘しているように、(25c) は「…机の表面で…」という解釈が前面に押し出される。また、「ある程度高さがある物体の上を指す場合には、*sobre* よりも *encima de* のほうがよく用いられる」と『西和中辞典第1版(小学館)』の ENCIMA の項目で指摘されているので、(25b) の「机」は (25c) の「机」よりも高い位置にあり「ねずみは(高い位置で)飛び跳ねていた」とする解釈もなされると推定される(インフォーマントの結果も同様であった)。

更に(26)を検討すると、命題真理値は同一(「机の上に手紙がある」)の解釈が普通であるが、(26a)は「机の中に手紙が入っている」、(26b)及び(26c)は「机の上に手紙がある」という2つの解釈が与えられる。更に言うならば、ENCIMA DE は一般に離れて上にある時に用いられるので(『新スペイン語辞典(研究社)』ENCIMA の項目を参照)、例えば誰かが手紙を手を持って、机の表面に接しないようにかざしているという解釈が(26b)には許されるということである。従って、(26a)は「机の中に手紙が入っている」、(26b)は「机の上方に(誰かが手にもってかざすように)手紙がある」、(26c)は「机の表面に手紙がある」(先に述べた SOBRES の「表面」の強調)というように、それぞれ別個の3つの解釈が可能である。以上の議論を踏まえた上で、更に以下の文を検討しよう。

- (27) a. ??El avión voló en la ciudad.  
 b. El avión voló por encima de la ciudad.  
 c. El avión voló sobre la ciudad.
- (28) a. El cuadro está en la pared.  
 b. \*El cuadro está encima de la pared.  
 c. El cuadro está sobre la pared.

(27)から推測できるのは、EN は物体と物体の間に接触を必要とし(接触して

いない (27a) は容認度が下がる), ENCIMA DE は必ずしも接触する必要はないということである (27b)。但し, (27a) は, 飛行機を巨視的視点かつ俯瞰的に眺めて (例えば衛星レーダーなど) 「飛行機は (レーダー上では) 街の上を飛んでいた」とする解釈もかろうじて可能である。それでも, もし「… (レーダー上では) 街の上を…」という解釈をスペイン語で表したいならば, (29)の方が適当である。

(29) El avión voló por la ciudad.

(29)は「…(レーダー上では) 街の上を…」の解釈の他に, 更に「街の片側からもう片側まで横切る」というニュアンスが加わる。そして, (28)が示すように, ENCIMA DE は EN と違い, 接触面があっても重力軸に逆らってはならない (重力軸に逆らった (28b) は非文となる)。そして, (27c) 及び (28c) が示すように SOBRE は両方の機能を有しうる。更に別の視点から (28a) と (28c) を見てみよう。両者とも「垂直面上」という意味があるため「絵画が壁面にかかっている」という解釈がなされる。しかし, EN を用いた (28a) は, もし壁が非常に小さく, 絵画が壁をはみ出してしまうような状態 (例えば, 壁をはみ出して窓の方にまで絵画が突き出しているような場合) では容認されないというインフォーマントの判断があった。即ち, EN を用いた表現の (28a) では, 絵画は壁面という空間からはみ出してはいけないということである。これは, EN が空間的内包関係を基本的意味としている証左と見ることができよう。一方, SOBRE を用いた (28c) は, 絵画が壁面からはみ出していようと「絵画が壁面に接している」という状態であれば, 絵画と壁面の位置関係がどうであっても容認される。

Durán (1973: 118) は, EN と SOBRE が多くの文脈において置換可能であり, 非スペイン語母語者がスペイン語を学習する際に混乱する原因になっていると指摘する。しかし, (24a) と (24c) の違いから判断すると, EN は空間的内包の意味を優先するのに対して, SOBRE は表面としての意味を優

先すると考えられる<sup>13</sup>。Durán は続けて、EN が容量や表面の内部を指し示す場合には SOBRE とは置換不可能と述べている。従って、(30)では EN は SOBRE に変えることはできないが、(31)では表面を表しているため、EN と SOBRE は置換可能である。

- (30) a. En la piscina hay muchos peces de colores.  
 b. En la estación me he encontrado con tu tío.
- (31) a. Clava este clavo en / sobre la pared.  
 b. En / Sobre la mesa hay varios libros.

Durán (1973: 118)

また、表面か容量かの解釈が曖昧な名詞が EN (ないしは SOBRE) に後続することもある。例えば、calle は容量的な解釈を受けるため SOBRE の出現を許さないが、acera の場合は、asfalto や suelo のような意味で使われる時は、SOBRE も EN も両方を許容する(32a)。しかし、acera が容量を表している場合には、(32b) と (32c) が示すように、EN は容認されるが SOBRE は出現することができない。

- (32) a. Hay un cadáver de un hombre tendido sobre / en la acera.

<sup>13</sup> López (1972) は、sobre el agua と en el agua, sobre la casa と en la casa の違いを挙げて、EN と SOBRE を以下のように説明する。

En general, podemos decir que si el concepto es considerado como un contenido (susceptible de contener) se emplea *en*; si es considerado como una superficie se emplea *sobre*.

López (1972: 192)

この区別は、(i) の言語表現によっても支持される。

- (i) a. Juan montó sobre un caballo.  
 b. Juan montó a caballo.  
 c. Juan montó en el caballo.

(ia) は「またがる」という馬の接触面(表面)を重視した表現である。なお、(ib) と (ic) の区別についての議論は、2.1.1 節を参照。

b. En la acera de enfrente hay un gran gentío.

Durán (1973: 119)

c. \*Sobre la acera de enfrente hay un gran gentío.

以上の例から、EN は空間的内包関係(容量)を重視するのに対し、SOBRE は表面を重視するといえる<sup>14</sup>。

### 3.2 EN と DENTRO DE

前節では SOBRE との比較により、EN に後続する要素は空間的内包関係を要求すると論じた。この空間的内包関係は、DENTRO DE にも見られる。

(33) a. Escondieron en su casa.

b. Escondieron dentro de su casa.

(33a) は「家に隠れていた」、(33b) は「家から一步も出ずに隠れていた」というように、両者とも空間的内包関係の意味を持つ。違いは、(33a) は家

<sup>14</sup> Durán (1973: 119) は更に続けて、EN は時間を指定するのに対し、SOBRE は概算の時間を指し示すだけだとしている。

(i) a. *En* el año 1939 comenzó la segunda guerra mundial.

b. Ese escritor naciera *sobre* mil novecientos o mil novecientos cinco.

Durán (1973: 119)

だが、空間表現については、例えば *en la mesa* も *sobre la mesa* もともに具体性があるので、本稿の主張と照らし合わせる限りにおいて、EN との比較に用いるには適さないと思われる。また、Durán の主張と本稿の主張を統合すると、時間表現の際に厳密に指定するのは、 $A > EN > SOBRE$  という階層的な序列関係が出来上がるが、それが空間表現におけるどの特性に基づいて時間表現に反映しているのか、定義することは難しい。敢えて言うならば、 $A > EN$  という厳密性の階層関係は本稿の述べたとおりであり (2.1.2 参照)、 $EN > SOBRE$  という階層関係は、「空間的内包関係」と「表面」から来るのであろう。先に *sobre la pared* は *en la pared* とは異なり、壁から絵画が飛び出しても容認されることを検証したが、言わばある範囲を「飛び越える」ことができる SOBRE に対して、EN はある範囲を「空間的に内包しなければならない」という点で、先の序列関係が出来上がっていると想定される。

という建物から外に出て、ベランダに出る、戸口まで顔を出すという行為が可能なのに対し、(33b)では建物である家から一歩も外に出てはならない。これは、ENの空間的領域指定が家を参照点として、家に付随するベランダや戸口までを指すからであろう。

DENTRO DEは、空間表現から拡張された時間表現において、ENとは異なる振る舞いを見せる。

- (34) a. Te llamaré en ocho días.  
b. Te llamaré dentro de ocho días.

山田 (1995 : 158)

(34a)は1週間以内ならばいつでも電話してることが予想されるが、(34b)では「1週間後に」を意味する。これはENが時間的内包関係を表すためにある特定の時間指定を要求しないことと類似するが(2.1.2節参照)、ENとは異なり時間領域において「～の後に」という意味も同時に持つ。(34)と同様に、dentro de dos semanasは「2週間後に」を意味する(『ポケット・プログレッシブ西和・和西辞典(小学館)』のDENTRO DEの項目を参照)また、『デイリーコンサイス西和・和西辞典(三省堂)』には「…後に」という記載しかない。『現代スペイン語辞典(白水社)』にはDENTRO DEは「…後に」「…が経過した時点で」の記載の後に「…以内に」という記述があるが例文は全て「…後に」を意味するものである。また、dentro de este año(今年中に)やdentro de la semana(1週間以内に)のように、ENと同様に「～の期間内に」や「～中に」を記載する辞書もある(『西和中辞典第1版(小学館)』のDENTRO DEの項目を参照)。

ポイントは、DENTRO DEに後続する時間表現に限定辞(esteや定冠詞など)がついているか、量化詞(unや数など)がついているかであろう。例えば、Te llamaré dentro de estos / los meses.は、「数カ月以内に」と解釈されるが、Te llamaré dentro de un mes / dos meses.となると「1か月後/」



か月後」と解釈される。同様に, dentro de los 15 días siguientes は, 定冠詞 los の影響により「15日(2週間)以内に」を表す。だが, これにも反例があり, 『新スペイン語辞典(研究社)』では, 「…後に」「…たったら」の記載の後, 「期間に」の意味が記載されていて, Volveré dentro de cinco días. (私は5日以内に帰ります) という記述がある。

それはともかく, 時間的内包関係で(34)のような違いが生じるのに, 何故空間的内包関係では(33)が示すようにほとんど違いが認められないかは, 現在のところ不明であり, 今後の研究が待たれる<sup>15</sup>。1つには空間表現から時間表現へのメタファー的拡張に際して, 必ずしも意味や機能の全てを投射するわけではないことが原因として挙げられよう。

当面のところ, EN は DENTRO DE と同じく, 空間表現においては内包関係を表すが, 時間表現においては「～以内に」の他に「～後に」の意味もある, と指摘するのみに留めておく。

### 3.3 EN と ENTRE

EN と ENTRE は空間的内包関係を表すという点で意味的にかかなりの類似が見られる。

- (35) a. Ya Daniel había vuelto a esconderse con la cara entre los brazos. [*El Jarama*: 61]  
 b. Daniel había vuelto a esconderse con la cara en los brazos.

<sup>15</sup> 山田(1995)は, 時間表現においては, EN よりも DENTRO DE の方が期限の時点をより厳密に指定するので, en ocho días は「1週間経つうちに」と時間的広がりを感じられるのに対し, dentro de ocho días は「1週間経った時点で」と解釈されると主張する。また, EN は過去のことも未来のことも表現できるが, DENTRO DE は未来のことに限られる, と指摘する(山田(1995:158))。

- (i) a. Acabó el trabajo *en* dos horas.  
 (彼は2時間で仕事を終えた。)  
 b. \*Acabó el trabajo *dentro de* dos horas.

López (1972: 189)

(35)は共に「腕の中」という空間的内包関係を表すが、ENTREはENに比べて内包関係をより強固に表し、またENTREが伴う前置詞句は、必ず指し示す空間の複数の境界が明示されていることが必要である。つまり、(35a)はentre uno y otro brazoのように言い換えることが可能であるが、ENを伴った(35b)では境界を明示しすぎると非文となる(\*en uno y otro brazo)。このことから、ENTREは意味的に空間的内包関係をプロトタイプとするのではなく、空間において明確にされた複数の境界の地点をプロトタイプとすると思われる。他方、ENは空間における閉じられた境界をプロトタイプとするが、複数の境界を前提とはしていない。以下を検討する。

- (36) a. Lo hizo en enero.  
b. \*Lo hizo entre enero.

(36b)は、期間が1月というだけで、その1月のいつからいつまでなのか明確でない、即ち複数の境界を明示していないので非文となる。

つまり、ENは閉じられた内部の状況(ないしは状態)を表すのに対し、entreは内部の2つの境界線をはっきりと明示する必要があり、明示できない表現では不適格となる。概略、ENは[x]のようなスキーマを持つが、ENTREは[←x→]のようなスキーマを持っていると言える。

### 3.4 EN と POR / HACIA

ENとPORの相違は、ENとAのそれに似る。例えば、en otra parteとpor otra parteは、前者は「別の場所」の内包を強調するが、後者は内包を表すのではなく、ある任意の地点から「別の場所」への移動を強調する。即ちENは内包を含意し、PORは内包を必ずしも含意しない。

- (37) a. Vino a Madrid en el verano.  
 b. Vino a Madrid por el verano.

(37a) は夏のある時点で行動を開始したこと(「Madrid に来た」)を含意するが、(37b) は「Madrid に来た」のが夏でありさえすれば容認され、開始時期がいつかは問題ではない。つまり、春から船旅で長い時間をかけて Madrid に到着した、という文脈内での使用が可能である。POR は A と同様、指し示す空間の境界が開いており、かつ動的である。(38)の区別も同様の説明が可能である。

- (38) a. Juan entró en Madrid.  
 b. Juan entró por Madrid.  
 (39) Juan fue a Madrid por Burgos.

(38a) の事象構造は「内包関係を持つ静的空間に入ったという動的变化」である。即ち、entrar は「入る」という移動動詞であるが、その終着点は en で示された、前置詞に後続する対象((38a)の場合は Madrid)の範囲内である。(38b)では en の代わりに por が用いられているが、この en → por の変化によって、「～の辺り」や「～のあちこちを巡って」という意味が含意される。また、前置詞 POR は、entrar por la ventana という表現を見てみると「窓から入る」という意味になり、EN とは異なり〈通過〉や〈経由〉の意味も持つ。POR の〈経由〉が如実に現れる文が(39)であり「Juan は Burgos を経由して Madrid に行った」という意味になる<sup>16</sup>。さて、en が por に変わった場

<sup>16</sup> Bruyne (1999: 671) は、EN と POR の違いを地域差及び古典的用法の観点から区別している(この点も A と似る)。

(i) a. En la mañana.  
 b. Por la mañana.

Bruyne は (ia) は主にラテンアメリカで使われ、(ib) はスペインで使われる表現であり、(ia) は古典的用法であると指摘している。しかし、(ia) を古典的

合、「～の辺り」という意味変化がある。つまり、entrar en はある閉じられた空間への移動であるが、entrar por には閉じられた空間というわけではなく、認知的に Madrid に境界線は設けられていない。つまり、POR は (40a) のようなスキーマを持つのに対し、EN は (40b) のようなスキーマを持つ。

- (40) a. [x → x …  
 b. … x → [→ x]

この違いは EN と HACIA においても同様である。但し、POR と HACIA では若干意味が異なる。

- (41) a. Lo hizo en (la) primavera.  
 b. Lo hizo hacia la primavera.  
 c. Lo hizo por la primavera.

(41a) は最もデフォルトな表現であり、「(彼は) 春にそれをした」という意味である。(41b) は春までに行為が完結していれば容認され、(41c) は春を少し過ぎて、初夏に行為を完結したという文脈でも容認可能である。つまり、POR と HACIA は、指し示す空間の境界が開いているが、後者の方がより強い境界を表す<sup>17</sup>。

---

でない」と指摘するインフォーマントもおり、解釈には揺れがある。

<sup>17</sup> POR と HACIA を比較すると、前者では背景が主要焦点ではなく、間接目標 (oblique goal) であるのに対し、後者は物理的到達点である直接目標 (primary goal) に際立ちがおかれるという点も相違の一つである (Tyler & Evans (2003: 180))。これは英語の for と to の対立でもあり、He ran to the hill and back everyday. 「彼は毎日丘まで走って往復した」は容認されるが、?He ran for the hills and back everyday. 「?彼は毎日丘に向かって走って往復した」は容認度が下がる。これは「直接」という感覚を HACIA が POR より持ち、POR は「間接」という感覚を持つことを示唆する。

### 3.5 EN と前置詞ゼロ

時間表現には EN を含めた前置詞句を伴う場合と伴わない場合がある。時間表現が前置詞句を伴わない原因は、選択制限による統語的・意味的な要因と心理的要因に大別される。前者では、後続する名詞句が年月や季節などを言及する際には EN が用いられるが、日付や曜日の場合に前置詞が使われない (en enero, en primavera, en 2013 等に対し, el 6 de abril, el lunes 等)。更に限定辞が時を表す名詞句に先行すると、後続する名詞句の種類にかかわらず前置詞は使用されない (42a)<sup>18</sup>。後者は主に López が主張する論であるが、話者が mañana, tarde, día 等の名詞句に対し日付や特定の瞬間を顕著に表したくないという心理的要因を持つと前置詞は使用されないという (42b) 及び (42c)<sup>19</sup>。

- (42) a. Ya que tú lo sabes, le repasas las lecciones este verano.  
[*Algo pasa en la calle*: 76]
- b. Y en cuanto se hubo sentado una mañana, como siempre, en su rincón... [*El Jarama*: 8]
- c. Yo sólo digo que se les ocurra otro día. [*ibid.*: 9]
- López (1972: 205)

EN が任意的に省略された表現は、それを伴う表現よりも後続する名詞句

<sup>18</sup> 限定辞が名詞句に先行しても EN が使われるケースがあるが、EN の使用は任意的であり、後述した心理的要因と関係すると思われる。(i) 及び (ii) を参照。

- (i) a. Aquellos primeros días trabajamos mucho.  
b. En aquellos primeros días trabajamos mucho.
- (ii) a. Estos días estaré muy ocupado.  
b. En estos días estaré muy ocupado.

<sup>19</sup> López (1972) は、社会的要因も EN の不使用に起因すると論じている。

- (i) Quizá el fenómeno comenzó por construir un *hecho de norma individual*; no obstante, poco a poco ha llegado a constituir una determinada *norma social*, pero no general. (López, 1972: 205)

の意味が軽減される。つまり、EN を用いた時間表現の方が、後続する名詞句の意味をより強調していることになる。

- (43) a. ¿es que no piensa usted cenar en esta noche? [*El Jarama*: 362]  
 b. Pocos hay hoy en día que hagan eso. [*ibid.*: 113]  
 c. y el calzado, que hoy en día te cuesta en pulmón. [*ibid.*: 270]  
 d. Mucho me dio que pensar, en muchas veces, y aún ahora mismo... [*La familia de Pascual Duarte*: 37]

(43)の各文はENを伴わない方が自然であるが、ENを任意的に伴うことによって後続する名詞句を強調するため、しばしば有標的である。

### 3.6 ENの空間的プロトタイプ再考

前節までの前置詞ENと他の前置詞句とを比較した結果<sup>20</sup>、ENの空間的プロトタイプとして(44)を提案する。なお、時間表現においてはENと前置詞ゼロを対比する必要があるが、空間表現にはこの対立は見られない。

- (44) ENは空間的内包関係を表す機能をプロトタイプとして持つ<sup>21</sup>。

(44)で提起されたプロトタイプは、García Miguel (1995: 128)にも類似の定義付けが見られる。García Miguelは、ENの定義を「状況、場所」の意味

<sup>20</sup> 以上の比較は、Dirven (1993) が示唆する英語における動詞+小辞構造によるものではない。これは、英語が動詞と小辞構造の組み合わせからある特定の意味(新しい意味)を生み出す言語であるのに対し、スペイン語はそうではないため、対照言語学的研究に委ねられるべき問題である。

<sup>21</sup> 本稿では、内包関係は絶対的な大きさや量といった概念で把握されるものではなく、相対的なものであると考える。つまり、Talmy (2000: 170) が示唆するような位相的拡張 (topological extension) における関係である。

を基盤として、前置詞 A, DE, HACIA など対比して「非移動 (no-movimiento)」, 前置詞 ANTE, BAJO, SOBRE, TRAS と対比して「非指向性 (no-orientación)」, 前置詞 CON, SIN, SEGÚN と対比して「境界内包括 (inclusión entre límites)」, 前置詞 ENTRE と対比して「明示的境界の必要性 (sin necesidad de límites expresos)」を挙げている。これら4つの意味を1つにまとめると、大まかに言って EN は「空間認識的な内包関係を表す」としてもいいように思われる。

#### 4. 理論的背景

(4)の理論的背景となるのがプロトタイプ理論とスキーマ理論である。本節ではプロトタイプ理論とスキーマ理論の接点を模索しつつ、EN の空間的プロトタイプを規定する。

##### 4.1 プロトタイプ理論とスキーマ理論

前置詞句を含む、ある言語表現の意味の関連性を認知言語学的に説明する方法は大きく2通りある。1つはある言語表現の最も典型的な意味を中核として、放射状に周辺的カテゴリーを形成していくプロトタイプ理論である<sup>22</sup>。もう1つは、カテゴリーメンバーに当てはまる共通性を抽出して、意味的カテゴリーを規定するスキーマ理論である。この2つは相互排除的なものではなく、意味的カテゴリーの形成を違った視点で捉えたものであり、実質的に

---

<sup>22</sup> 本稿における「最も典型的な意味」とは、ある語の意味の集合内での中核的な意味を指す。しかし、空間辞の意味ネットワークにおいて、何が中核的な意味となりうるかは厳密には規定されていない。空間辞の最も典型的な意味に関して、直感に訴えて説明する論 (Dewell (1994)) や、特定の前置詞の特定の分析に最もうまく合致する意味を「最も典型的な意味」とする論 (Lakoff (1987)), 通時的に最も早い意味が典型例になりうるという論 (Tyler & Evans (2003)) 等がある。本稿では、前節で示したように、他の前置詞句との比較から意味成分を取り出す方法を採用した。

は両者が相互作用をすることで1つのカテゴリーが構築されると考えられる。

プロトタイプ理論は、中核的な意味と周辺的な意味の容認度の差をうまく説明する。しかし、周辺的な例に的を絞ると、メンバーによってはカテゴリーの成員としてみなしてよいかの基準が曖昧であり、厳密な意味での規定ができない。即ち、カテゴリーの境界はファジー (fuzzy) である (Labov (1973) 他を参照)。カテゴリー間の境界線が曖昧であるとする捉え方はプロトタイプ理論の中心的な主張でもあるが、成員間における境界の画定が漠然と為されていることをも同時に意味する。

この点を補うのがスキーマ理論である。スキーマ理論では、ある言語表現において、理想的には全ての成員が共通のスキーマを持つ。しかし、だからといって、ある言語表現が特定のスキーマを持っていた場合、ただちにその意味の成員と成りうるかということ、そうではない。この点で、両理論はお互いに助け合いながら成員を決定しているということになる。

#### 4.2 トラジェクターとランドマーク

更なる本稿と関連する基本概念は、モノ (thing) との関係 (relation) を示す言語表現である。Langacker (1987) に代表される認知文法では、言語の意味構造は、プロフィール (profile)、即ち焦点が当てられているか否かで規定されると考える。プロフィールとは言語表現の中で際立ちを持ち、焦点が当たる部分を指し、その背後にある部分や対象を認知する際に背景となる知識をベース (base) と呼ぶ。

プロフィールされるものは、1つの時もあれば複数ある時もある。1つの例として「親族関係」という幅広いベースを考えると、その中から一部をプロフィールすることで、「叔父」、「姪」、「従兄弟」のような様々な概念が得られる。そして仮に「叔父」が注目されれば、それを新たなベースとして、父方か母方か、実の両親より年上か年下かという基準でプロフィールを絞ることも可能である (大堀 (2002:15) 他を参照)。



プロフィールされた存在物が複数ある場合、その関係性が重要になる。以下の例を考察しよう。

- (45) a. The lamp is above the table.  
b. The table is below the lamp.

河上 (1996: 21)

(45)のようにプロフィールされたものが2つ以上ある場合、そのうち1つにより焦点が与えられるという非対称性が見られる。プロフィールされた「関係」に携わる参加者の中で、最も際立つものをトラジェクター (trajector, 以下 TR と記す) と呼び、TR 以外のプロフィールされた参加者で、TR の基準点として働くものをランドマーク (landmark, 以下 LM と記す) と呼ぶ。(45a) では、The lamp が TR, the table が LM であるが、(45b) ではそれが逆転して、The table が TR, the lamp が LM である。際立ちの分化の違い、即ち TR と LM の選択の違いによって、前置詞の使用が異なったり (above と below)、話し手が聞き手に与える意味的な影響に大きな違いをもたらしたりする。

さて、EN の空間的プロトタイプは、ある物体(ないしは抽象体)が別の物体(ないしは抽象体)において、基本的に内包関係を表している<sup>23</sup>。López (1972) は、EN の代表的スキーマ<sup>24</sup>を以下のように説明する(下線は筆者)。

<sup>23</sup> Hernández Alonso(1970), Hernández Alonso(1984), RAE(1973), Gili Gaya (1964) 他を参照。

<sup>24</sup> López (1972: 136) は、Esquemas representativos という用語を用いて(46)の概念を図式的に説明している。端的に述べると、スキーマとはあるカテゴリーに属する成員全てから抽出されうる特性であり、このスキーマを持たない成員は即ちそのカテゴリーの成員ではない。プロトタイプは、あるカテゴリーに属する成員の中で最も典型的な一成員の抽象的特性であり、必ずしもカテゴリーの成員全てが持つ特性を持つ必要はない(Langacker (1987) 及び 4.1 節参照)。従って、López の言う代表的スキーマとは、実際は(EN の機能の中で最も典型的な一成員である)プロトタイプを指していると思われる。

- (46) EN representa la interioridad en un doble límite, y también el movimiento franqueando un límite de interioridad.

López (1972: 136)

前節までの考察から EN が基本的に空間的内包関係を表す機能を持っていることがおおよそ明らかになったと思われる<sup>25</sup>。ここで「機能」を強調するのは、空間における TR と LM の空間的幾何学配置のみでは、EN に代表される空間辞が表す関係を説明できないからである (Tyler & Evans (2003), Vandeloise (1991) 他を参照)。例えば、La flor está en el florero. では、花の全体が花瓶の中にあるわけではない。「内包」の機能において TR が LM に内包されていると解釈されるためには、どの程度まで囲まれているのかが問題となるが、いわゆる部分的内包も内包の一部とみなすことができる。更に、内包の概念は境界や外部の概念とを比較して用いるものであるが、この認知的概念化を含めて、本稿では「内包」を EN の一機能として提案する<sup>26</sup>。

<sup>25</sup> 内包関係を表す際に前置詞 DE を使用する時があるが、それは以下のような文脈に限られる。

- (i) a. Las chicas de la sala son de mi clase.  
(広間の女の子たちは私のクラスの子だ)  
b. Las chicas que están en la sala son de mi clase.  
(広間にいる女の子たちは私のクラスの子だ)  
c. \*Las chicas en la sala son de mi clase.  
(\*広間に女の子たちは私のクラスの子だ)

山田 (1995 : 153)

(i) から、EN を伴った名詞句は作れず、EN が現れた時は必ず主要部 (head) として前置詞句を作らなければならないと考えられる。しかし、DEBAJO DE 等の前置詞句も主要部として働かなければいけないことを考慮すると、(i) は EN の特殊な機能によるものではなく、DE の機能的汎用性に起因するものと考えられる。従って、「DE は空間的内包関係を表しうる」という説明よりも、「DE は語用論的に予想されうる前置詞の機能を代行しうる」という定式化の方が正しいように思われる。

<sup>26</sup> 「内包」は空間的關係において、「壁に絵がある」や「ポットにコーヒーがある」のように、存在の意味も同時に持つ。つまり、モノと位置との空間的關係が「存在」の骨格構造をも形作っていると言える。

### 4.3 理論的背景からの具体的検証

以上から、(44)の妥当性を検証する。

- (47) a. Mi carta está en la mesa.  
 b. El pez de colores está en la pecera.  
 c. El cuadro está en la pared.  
 d. Pedro vive en Madrid.

(47)は、それぞれ主語が TR, EN に後続する要素が LM となっている。(47a)では TR は LM に支持される (または内包される), (47b) は TR が LM に内包される, (47c) は TR が LM に接触している, (47d) は TR が LM に内包される, という関係にある。このうち、前節の他の前置詞との比較から内包関係を表す (47b) がより典型的であり、EN の第 1 義的な要素を担っている。従って、(47b) との比較から、①周辺的なカテゴリーとして EN の他の機能が説明できること (プロトタイプ理論), ② EN の他の機能に共通の要素があること (スキーマ理論), を証明できれば、EN のプロトタイプが確定できよう。

まず、(47a) では TR は明らかに LM の支配下に入っていると言える。手紙は机の上であり、物理的に落下することを防いでいる (「支持」としたのもその理由による)。支配下に入っているということは、TR は LM の影響内にあることを意味する。従って、(47a) では LM の力の範囲内に TR が位置していることから、TR は LM に力的に「内包」されている。仮に手紙が机よりも大きく、手紙の辺が机の外にはみ出しているような状態でも手紙が机によって「支持」されていることに変わりはない。即ち、TR と LM の物理的な大きさは、直接 EN の機能的意味とは関係がない<sup>27</sup>。

<sup>27</sup> 以下のようにあまりに TR が LM に対して大きい場合、EN は容認されないが、ENCIMA DE 及び SOBRE は容認する。これは内包関係を表すよりも重力軸に

(47c) は、TR が LM の外に出ることを許さない。絵が壁から離れて宙に浮かんでいたり、絵が壁ではなく壁と同一面上にあるガラス窓に移動したならば、(47c) は成り立たない。つまり TR は LM が限定する領域内に留まらなないと (47c) は容認されない。従って、TR は LM に領域的に「内包」されている。

(47d) は (47a) と (47c) の融合的な機能を持つ。即ち、Pedro は Madrid という街の領域内に住んでいるし (Madrid から外に出たら (47d) は成り立たない)、かつ Pedro は Madrid の敷地内で (地面に接した) 居住地を構えている。この場合、仮に TR が木の上にあったり、あるいは(何らかの手段で) 空中に浮いていたとしても、LM が及ぼす力の範囲内にあることに変わりはない。

TR と LM は必ずしも物理的存在物ないしは実体そのものである必要はなく、二次的な位置としての参照点が TR 及び LM として機能することもあ。例えば (47d) において、Pedro は常に Madrid に物理的に存在しなければならないというわけではない。Pedro が何らかの用事で一時的に外出していたとしても、Pedro が通常は Madrid に住居を構えている限り、(47d) は成り立つ。即ち、Pedro の住居が参照点 (reference point) として機能し、(47d) において標的 (target) である Pedro を間接的に指し示している。従って、TR は LM に力的にも「内包」されている<sup>28</sup>。

従って、EN の空間的機能は、①(47b) を典型的なものとして、力的、領域的に放射状カテゴリーを形成する(プロトタイプ理論)、②共通の要素として

---

沿った支持に際立ちを置いているためと思われる。

(i) El coche está \*en / encima de / sobre el poste de electricidad.

<sup>28</sup> ここでいう参照点とは、換喩的な参照点能力 (reference-point ability) による参照点 (reference point) である。即ち、本来ならば指し示さなければならない人、物、事態等に対して、それらへの心的アクセスが比較的容易な別の事物や事象を経由して間接的に行われる場合に、後者を参照点、前者を標的と呼ぶ。また、ある参照点を解してアクセス可能な対象の集合 (潜在的な標的) を支配域 (domain) と呼ぶ。例えば、英語の所有表現や日本語の二重主語構文 (e.g. 象は鼻が長い) も参照点の具現の一種である (西村(2002))。

「内包」を持つ（スキーマ理論）と説明できよう。

さて、(47)を見る限り「空間的内包」に文字通りの空間的な内包と、面的範囲指定という意味での内包という、次元の異なる「内包」概念がありうる。更に、(47)の表現は、全て「内包」を基本的機能として持つと規定したが、プロトタイプを「支持」に設定して EN の機能を説明することが可能かもしれない。前者については、面的範囲指定という「内包」も文字通りの「内包」も、空間を占拠するという点では同じである。どちらがより基本的、即ちプライマリーで原初的なのかは今後の研究が待たれるが、先の辞書的定義に「～の上で」を意味する面的範囲指定の記述が、常に「～に」を意味する内包の記述の後に来ることを考えると、やはり空間的内包の関係が優先されると思われる。後者についての考察も同様で、他の前置詞との比較から EN の空間機能が内包であることを明示しているのも、EN が持つ「支持」の機能がプロトタイプとして働く可能性は低いと思われる。

## 5. 空間的内包関係から抽象的内包関係への拡張

(44)で「EN は空間的内包関係を表す機能をプロトタイプとして持つ」と主張した。ここで「空間的内包関係」がスキーマではなくプロトタイプとするのは、(44)から更に「抽象的内包関係」へと拡張されうるからである。即ち、EN の空間的機能において「内包」はスキーマになりうるが、「空間的内包関係」は「抽象的内包関係」へ拡張が可能という点から EN 自身においてはプロトタイプとしての機能しか果たさない。なぜなら、EN の抽象的機能において、「内包」は必ずしも共通の要素として働くとは限らない（従ってスキーマとは成り得ない）が、空間的内包関係から放射状カテゴリーを形成することはできるので、プロトタイプとなりうるからである。

Lakoff (1987: 420-424) は、こうした文脈の拡張を前置詞では重視せず、最大規定 (full specification)、即ち、網羅的に機能を提示し前置詞の個々の意味を特定しようとする。これは、Lakoff が多義性のネットワークに重点を

置き過ぎ、スキーマを軽視したためであると思われる(具体的な反論は Kreitzer (1997: 292) を参照)。Lakoff の問題点は、文脈的拡張における語用論的強化から生み出された意味を別個に独立した意味として扱ったことであろう<sup>29</sup>。即ち、ある情報を表現する言語の形式的表現及び語彙的意味と、文中の他の言語要素が手がかりとなって生じる情報を統合化する概念及び文脈的意味を十分に区別できていないことに問題がある。

「抽象的内包関係」とは、「空間的内包関係」から時間<sup>30</sup>、概念等への拡張である。「空間的内包関係」がプロトタイプとなるのは、人間は知覚した空間物理関係や事物に関する理解を非物理的領域へと絶えず拡張しているからである(Lakoff & Johnson (1980) 他を参照)。即ち、「空間構造が概念構造へ写像(mapping)される」(Mandler (1992: 591)) のである(田林(2012: 180))。この主張は、先に述べた物理的空間<時間的空間<心理的空間の階層を裏付けるものである。

- (48) a. La olimpiada de Barcelona se celebró en 1992.  
 b. Mi mujer pintó el dormitorio en color rosa.  
 c. En absoluto.

<sup>29</sup> 習慣化され、固定された意味拡張である語用論的強化の表現はもはやメタファーの助けを必要としないが、しかしその価値を減ずることにはならない。Traugott (1989) 参照。

<sup>30</sup> 本稿では、時間と空間に関連する語義の境界は必ずしも明確ではないと主張する。以下の文を参照。

(i) 国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。夜の底が白くなった。  
 ここでの「夜」は時間義と空間義を両方表しうる。従って、時間と空間の同時存在性は常に念頭に置く必要がある。更に以下の文を参照。

(ii) In Indonesia, I was bitten 33 times by mosquitos.

中右・西村(1998: 49)

(ii) で「私」が蚊に 33 回も刺されたのは、インドネシア滞在中のことである。In Indonesia は文法的には主語の付加語であり、主語の付加語は一般に主動詞の表す事態に対し一時的な付帯状況を表す。よって、(ii) は物理的空間の場所とも、時間的空間を指示するとも解釈できる。

(48a) は、比較的平易な空間的内包関係から抽象的内包関係への拡張と思われる<sup>31</sup>。なぜなら、例えば時間軸を紙に書いてみれば、容易に視覚的に時間の内包関係を認知できるからである。従って、(48a) は Grady (1997) のいう「外的経験からもたらされた抽象概念」といえよう。それに対し、(48b) では内包関係を視覚的に表すことは難しい。これは、(48a) の抽象概念を更に抽象的に拡張したものであり、「内的経験からもたらされた抽象概念」といえる。(48c) はそもそも知覚可能な現象を描写していない。従って、抽象度は (48b) よりも遥かに高い。

しかし、(48a) を概念的に理解し得ない場合、(48b) 及び (48c) の意味を類推することは（語彙的特性として定式化した場合を除いて）不可能だと思われる。即ち、(48b) 及び (48c) を解釈するにあたり、直接的なベースとなった経験は (48a) のような抽象的な概念であったとしても、そもそも (48a) が生じたのは、物理的な空間的内包関係からである。そして、内的経験が生じるのは外的経験からである。認知の源は外的経験からであるため、わざわざ抽象度の段階に応じて外的経験と内的経験を区別する必要性がない。つまり、Grady が主張するように、前置詞句表現において抽象度に差があり、それぞれ直接的に導き出される概念が外的経験か内的経験かの区別はなされ、それが言語表現における抽象度を測る 1 つの目安となるかもしれないが、そもそも内的経験は外的経験がないと発生しない経験であるため、根本的な差異は存在しない。

## 6. 結語と今後の課題

以上、前置詞 EN を主に空間的機能に的を絞って概観した。過去の EN におけるプロトタイプの定式化としては、Hernández Alonso (1984: 512-514)

<sup>31</sup> Evans (2000) は、時間の概念は部分的に外的経験より精密化されているが、究極的には外的経験からのイメージスキーマではないと主張している。

が最も成功しているようであるが, Hernández Alonso は EN の意味を空間, 時間, 概念の 3 つに分けて別個に説明しているだけで, 相互間における共通のスキーマを抽出できず, また EN のプロトタイプを明らかにもしていない。本稿では, 他の前置詞との比較から EN のプロトタイプを「空間的内包関係」とした上で, 抽象的内包関係への拡張を示唆した。

今後の課題として, ① EN とその他の前置詞句との比較を徹底すること, ② EN のプロトタイプからより抽象的な概念, 例えば (1f) や (1g) を説明する言語理論を構築すること, ③ EN の意味が放射状カテゴリーを形成し, 意味的ネットワークを構築していることを明らかにすること, などが挙げられよう。

## 参考文献

- Alarcos Llorach, E. *Estudios de gramática funcional del español*. Gredos. 1984.  
 Alarcos Llorach, E. *Gramática de la lengua española*. Espasa Calpe. 1994.  
 Brøndal, V. *Théorie des prépositions. Introduction à une sémantique rationnelle; L'ordinalité des prépositions du français moderne; Ordklasserne. Parties orationis*. Munksgaard. 1950.  
 Bruyne, Jacques de. "Las preposiciones." en Bosque, I. y Demonte, V. (eds.), *Gramática descriptiva de la lengua española*. 1. vol. 657-703. Espasa Calpe. 1999.  
 Dewell, R. "Over Again: Image-Schema Transformations in Semantic Analysis." *Cognitive Linguistics*, 5(4). 1994.  
 Dirven, R. "Dividing up Physical and Mental Space into Conceptual Categories by Means of English Prepositions." *The Semantics of Prepositions: From Mental Processing to Natural Language*: 73-97. Mouton de Gruyter. 1993.  
 Durán, Juan de Dios, L. *Las preposiciones*. SGEL. 1973.  
 江藤一郎『基本スペイン語文法』芸林書房。2003。  
 Evans, V. *The Structure of Time: Language Meaning and Temporal Cognition*. Georgetown University Press. 2000.  
 García Miguel, J, M. *Transitividad y complementación preposicional en español*. Universidad de Santiago de Compostela. 1995.  
 Gili Gaya, S. *Curso superior de sintaxis española*. Bibliograf. 1964.  
 Grady, J. *Foundation of Meaning: Primary Metaphors and Primary Scenes*. UC Berkeley. 1997.  
 Henández Alonso, C. *Sintaxis española*. Valladolid. 1970.



- Hernández Alonso, C. *Gramática funcional del español*. Gredos. 1984.
- 池上嘉彦『意味論—意味構造の分析と記述』大修館書店。1975。
- Jespersen, O. *The Philosophy of Grammar*. George Allen & Unwin. 1924.
- 河上誓作『認知言語学の基礎』研究社出版。1996。
- 小林一宏他『詳解スペイン語改訂・増補版』上智大学出版会。2003。
- Kreitzer, A. “Multiple Levels of Schematization: a Study in the Conceptualization of Space.” *Cognitive Linguistics*, 8. 291-325. 1997.
- Labov, W. *The Boundaries of Word and Their Meaning. New Ways of Analyzing Variation in English*. Georgetown University Press. 1973.
- Lakoff, G. *Women, Fire and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. University of Chicago Press. 1987.
- Lakoff, G. & Johnson, M. *Metaphors We Live By*. University of Chicago Press. 1980.
- Langacker, R. *Foundation of Cognitive Grammar, vol. 1: Theoretical Prerequisites*. Stanford University Press. 1987.
- Langacker, R. “Subjectification.” *Cognitive Linguistics*, 1: 5-38. 1990.
- López, M, L. *Problemas y métodos en el análisis de preposiciones*. Gredos. 1972.
- Mandler, J. “How to Build a Baby: 2. Conceptual Primitives.” *Psychological Review*, 99. 1992.
- Marcos Marín, F. *Curso de gramática española*. Editorial Cincel. 1980.
- 中右実・西村義樹『構文と事象構造』日英語比較選書 5。大修館書店。1998。
- 西川喬『わかるスペイン語文法』同学社。2010。
- 西村義樹編『認知言語学 I : 事象構造』シリーズ言語科学第 2 巻。東京大学出版会。2002。
- 大堀壽夫『認知言語学』東京大学出版会。2002。
- Real Academia Española. *Esbozo de una nueva gramática de la lengua española*. Espasa Calpe. 1973.
- Real Academia Española. *Nueva gramática de la lengua española*. Espasa Calpe. 2009.
- 田林洋一「スペイン語の移動表現に関する一考察—英語、日本語との比較を通して」『小樽商科大学人文研究』第 124 輯：179-209。
- Talmy, L. *Toward a Cognitive Semantics*. MIT Press. 2000.
- 田中春美他『言語学のすすめ』大修館書店。1978。
- Traugott, E. “On the Rise of Epistemic Meanings in English: an Example of Subjectification in Semantic Change.” *Language*, 65: 31-55. 1989.
- Tyler, A. & Evans, V. *The Semantics of English Prepositions*. Cambridge University Press. 2003.
- 瓜谷良平『改訂スペイン語の入門』白水社。2002。
- Vandeloise, C. *Spatial Prepositions: A Case Study from French*. University of Chicago Press. 1991.
- Whorf, B, L. *Language, Thought, and Reality. Selected Writing of Benjamin Lee Whorf*. Carroll, J, B. (ed.,) MIT Press. 1956.
- 山田善郎監修『中級スペイン文法』白水社。1995。